

被爆体験

佐々木 由政

私は、昭和十九年九月一日、現役兵として広島砲第二九五三部隊に入営しました。

被爆状況

昭和二十年八月六日午前八時ごろ、原爆がさく裂し光とともに兵舎の窓ガラスなどが全壊しました。その時、私は広島県安芸郡坂村の西方、鯛尾の陸軍高射砲陣地にいました。約五分くらい後に広島上空に広がった厚さ十メートルほどの炎の層が左右に広がり、キノコ雲が発生しました。広島街は、火と煙が充満し、

一面、火の海でした。

翌七日早朝、陣地から下を見ると、浜辺に死体が所狭しと並べられていました。我々は食糧を受け取るため、陣地から軍の船艇で宇品港から兵舎に立ち寄りました。兵舎の屋根は吹き飛び、なくなっていました。宇品街道筋などでは、中年の女性や子どもたちが狂ったように泣き叫んでいたのが、強く印象に残っています。街路樹なども白く焼け垂れ下がっており、比治山公園下の市電の鉄柱が途中から爆風のために折れ曲がっていました。そのそばで、救援隊の人たちが焼け残りの柱を積み重ねて、そ

の中へ死体を入れて火葬にしていた。建物はすべてなく、焼けただけ残骸（ごんがい）と灰だけで、生きた人影はまばらです。生き残った人たちも、顔面はもちろん腕や足まで露出部分は全部焼けただれ」とぼとぼと歩きながら「兵隊さん、水をくれ」「このかたきを取ってくださいよ」と叫ぶように言っていました。

指示を受けるため比治山の本部に行きました。本部の建物は、爆破され跡形もありませんでした。

本部の指揮下に入った救援隊は、紙屋町の救援班の収容テントに着。前日から来ていた者と交替。一面焼け野原で、爆心地の直下であったと記憶しています。ここで、不眠不休の救援作業が続きました。

江波の陸軍病院が全滅し、本部も